

# 美術館における伝統・文化に関する教育普及活動の取り組み

## — 永青文庫たんけん隊プログラム実践報告 —

犬童 昭久

### 一 はじめに

美術館にある美術品をみることだけが鑑賞活動ではない。子ども同士が作品について意見を交換し、同じ考えには共感し、違う考えは尊重する。様々な資質や諸能力を働かせ、それらを相互に関連させて活動に参加する。こうした点を活かしながら子どもたちが「自分を表現する力」や「他者を理解する力」等を自ら獲得する「協同的な学び」が展開する活動である。美術品の知識獲得だけにとどまらず、制作表現等、体験活動も合わせて行うことで鑑賞活動はより質を増す。このような活動をとおして、美術館での体験は生涯学習の観点からもかけがえない思い出となる。

熊本県立美術館では、子ども達を対象とした教育普及活動として、平成四（一九九二）年度より作品の鑑賞活動、時には制作を行う表現活動等も取り入れた子ども向け（小・中学生対象）ワークショップ「子ども美術館」<sup>①</sup>を実施してきた。

子ども達の持つ様々な資質や諸能力は、学校・家庭・地域社会が相互に連携しつつ社会全体で育んでいくべきものであり、その育成

は学校や社会教育・文化施設に求められる共通の教育課題といえる。したがって美術館において社会教育的役割と共に教育普及分野の活動も重要である。美術館は多様化、高度化する人々の学習意欲に的確に対応し、生涯学習のための重要な役割を担う場でもあり、そのことから子ども達を対象とした教育普及活動を行うことは意義深いことである。

### 二 「永青文庫たんけん隊プログラム」の概要

#### 1 「永青文庫たんけん隊プログラム」の趣旨

平成二〇（二〇〇八）年度、四月に熊本城築城四〇〇年を記念して、本丸御殿が復元された。同年に熊本城二の丸公園内に建つ熊本県立美術館では「細川コレクション永青文庫展示室」が開館し、細川家ゆかりの美術品が定期的に展示されることとなり、公益財団法人永青文庫所蔵の多様な美術品を熊本で鑑賞できるようになった。国内屈指のコレクションを継続的に公開することで、県民の文化振興に大きく寄与すると共に次代を担う世代への教育素材としても役

割を果たすことが期待されている。

また、新学習指導要領には「伝統、文化に関する教育の充実」「我が国の美術文化に関する鑑賞指導の充実」が盛り込まれている。そのことから学校教育では日本の伝統や文化をテーマとした鑑賞授業も以前より取り組まれるようになり、子ども達の興味関心も高まっている。このような理由から本活動では、子ども達が永青文庫の美術品等を鑑賞し、また、それらに関連した伝統文化に関する体験をとおして日本の歴史や文化に興味を持ってもらい、芸術、文化を愛好する心情を育てることを目的にした「永青文庫たんけん隊」プログラムを実施した。

## 2 伝統・文化に関する教育の必要性

ここで、伝統・文化を尊重する教育の充実が求められているのかについて背景や経緯を確認しておきたい。その手掛かりは、新しい時代にふさわしい教育基本法の見直しを提言した教育改革国民会議やその提言を受けた中央教育審議会における議論の中にある。特に重要なのは次の二点であるとされている。

一つは、「伝統や文化を大切にすることに、次代に伝えていくべき価値あることであり、二一世紀の教育においても大切にはぐくんでいかなければならない」という『不易』への対応の視点。いま一つは、「グローバル化が進展する中で、民族、宗教、文化の違いに根ざした様々な問題が顕在化し、国家間の友好関係を強化し、尊重する精神を涵養すること、地域社会の中で他国の人々と

共生していくことの重要性も高まっている。このことは同時に、自らのアイデンティティをいかにしつかりもつかという課題が課せられているということでもあるという<sup>3)</sup>、『変化』への対応の視点であるとしている。

日本の伝統や文化を理解し大切にすることは、従来、日常生活の具体的な時と場に即して行われてきたものである。しかし、時代の変化と共に、家庭や地域社会において子ども達が伝統や文化について理解したり経験したりする機会は減っている。また、国際化がますます進展する中、子ども達が国際社会に貢献し、世界の人々から信頼される日本人となるためには、異文化に対する理解を深め、異なる文化をもつ人々と協調していく態度を育てる必要がある。

## 3 活動における配慮事項

活動では、子どもの身近な生活や地域にある日用品、美術品、建造物などから、共通に見られる表現の特質などに気付かせることも大切である。また、美術文化は、作品、作風、作家、価値観、美意識等を含めた美術表現の総体として広くとらえる必要があるが、広く扱いきると学習のねらいが定まらない場合もある。

そして美術文化は、それらをつくりだした人々が自らの生活や人生をより豊かで充実したものにするために、長い歴史の中で築き上げ、受け継がれ、発展してきたものである。それらには、大切に守ってきた多くの人々の願いや美へのあこがれなどが込められている。これらを題材にして学習することで、美術文化を実感的にとら

え、その特性やよさを理解するとともに、伝統的な表現や価値観が現代の生活の中にも息づいていることを気付かせるようにすることも大切である。

例えば、絵をはじめ日用品や衣類、建造物など、生活にある身の回りのものを見たときに、「和風」であると感ずることがある。それは人々が日常生活の中で文化に慣れ親しんできており、その特性などを無意識ではあるが理解しているからである。このような感覚を生かして美術文化の学習に取り組むことが大切である。今生きている現代から過去を見ることになるので、現代社会の中で身に付けた価値観などを生かして過去の作品を理解し、美術文化の継承と創造への関心を高めることも重要である。上記のことを配慮事項として取り組んだ。

#### 4 活動する際の留意点

永青文庫の美術品には古美術も多く含まれる。そこで古美術を例にとつて考えてみる。古美術の特徴として、「用途」を持ったものであるということがあげられる。さらに、屏風や扇子は「折る」、絵巻物や掛け軸は「巻く」などの支持体の特徴をあげ、その機能から生じる表現の特徴を考える。次に、対象に何が描かれているか考える。多くの絵画作品には「四季」「行事」「文学」など「主題」を持つ。さらに対や組となつてさらに大きな主題を持つものもある。

そして、その作品がどんな空間にあったかを想像する。古美術は本来単体で成り立つものではなく、ある美意識の下、厳密に構成さ

れた空間に正しく配置されてこそ生きる。鑑賞者も所有することはできなくとも、己の美の世界を表現した小宇宙を想像して楽しむことは知的な喜びとなる。

つまり、「用途」を知り、「主題」を感じ取り、それが置かれた空間を想像することで、古美術の魅力的な鑑賞行為が成立する。また、絵画だけでなく、他の領域の作品についても、この枠組みを応用して考えることができる。

また現代にあるもので類似するものをあげさせ、仕組み、用途や材質を比較する。ある程度意見が出たら、屏風や掛物のように「見て楽しむもの」、絵巻物など「読んで楽しむもの」、茶道具、武具、信仰の道具など、当時どのように使用されていたかをできるだけわかりやすく説明する。また、「折る」、「結ぶ」、「巻く」、「包む」など日本・東洋的な機能にも着目し、その特徴を考える。

次に作品には何が描かれているのか、全体の色調はどうか、画材、材質について考える。作品に描かれているものを詳細に観察し、そこに表現されている主題をについて考える。具体物が描かれていない場合は、家紋、結び目、色彩の重ね方などに注目し、季節や行事、用途、格式が巧みに表現されていることに気づく。そして、日本画や時絵など古美術独特の表現の特徴を知り、技法と表現との関連を考える。

そして、誰がこの作品を使ったかを想像する。「どんな人だろうか?」「どんな場所にあったのだろうか?」「どんな場面が使われたのだろうか?」子ども達がそれぞれ想像を膨らませる。そして、

実際にそれを使用していた人の話をしながら、現代と過去の感覚の違いや共通点を見つける。作品を描いた人のことにも言及する。作者の意図はどれくらい作品に反映されているのかについて話し合う。美術品は作者の意志で成り立っているわけではない場合もあることは一般的に見過ごされがちであり、芸術とはパトロンと職人（芸術家）が互いに影響を与え合ってつくる側面もあることを学ぶ。以上のことを活動の留意点として取り組んだ。

### 三 活動の内容

「能」「茶道」「日舞」「肥後鐺」「花押」「絵巻」「絵師」といった題材で、展示会の内容に則しながら鑑賞や体験を行った平成二〇（二〇〇八）年度から平成二三（二〇一一）年度までの活動の内容である。各回、鑑賞の手引き等ワークシートを作成し、テーマを設けて活動を行った。集合場所は講堂。当日受付。活動は午前十時三〇分から十二時まで。子ども達の観覧料は無料にし、講師は外部から招いた専門家や学芸員等が務めた。内容は次のとおりである。

#### 1 平成二〇（二〇〇八）年度プログラム

四月二七日「殿様のポケット探検！」（関連展『細川家の文と武と美』）（テーマ「永青文庫ってなあに？」「日本の絵画・掛物」「書や絵のかたち」「何が描かれているのか？」「どのようにみるのか？」）展示している美術品の見所をクイズを交えながら紹介し、

その後、展示会場にて展示品を前にギャラリートークを行った。細川家の歴史、永青文庫の成立、当時の大名の暮らしぶりについてワークシートを用いながら紹介した。ワークシートを切り抜けばミニ掛物になる。並べることで一つの作品の理解も深まる。そこに描かれている動植物等の絵と実物とを比較した。写生だけでなく手本を写す江戸時代に絵師たちの練習法も紹介した。参加数六三名。

五月十一日「永青文庫鑑賞のツボ！」（関連展『細川家の文と武と美』）（テーマ「屏風ってなあに？」「屏風の構成」「何が描かれているのか？」「どのように使われるのか？」）永青文庫についてクイズを交えながら紹介し、ミニ屏風をつくった。その後、展示会場にて作品鑑賞を行った。作品を印刷したものを折れば、簡単にミニ屏風ができるようにした。その屏風の所有者を考えるクイズも行った。参加数四四名。

八月二日「レインボーマンと行く、細川コレクションの旅！」（関連展『細川家のおもてと奥』）（テーマ「四〇〇年前の現代アート？」「視点を変えて見てみよう」「名人に聞こう！」）講師は美術家の岡山直之氏。細川コレクションと現代アートをかけあわせて企画した異色のワークショップ。ギャラリートークを交えながら永青文庫展示室で美術品を鑑賞した後、外でシャボン玉を熊本城に向けて飛ばして楽しんだ。最後には皆で伝統のお菓子「加勢以多」を味わった。参加数四四名。（口絵6）

十月十二日「子ども能たいけん！」（関連展『細川家と能楽』）（テーマ「能ってなあに？」）「能の歴史」「能道具」「能面」「能装束」「名人に聞こう！」）講師は喜多流能楽師・狩野琇鵬氏。物語に合わせて、役と面、衣装が変わることを紹介した。場面に応じて能の表情がどう違うか考えた。面を付けて能を舞う体験を行った後、展示室で美術品を鑑賞した。参加数四〇名。

十一月二三日「肥後鐔ってなあに？」（関連展『細川家と肥後の伝統美』）（テーマ「鐔ってなあに？」）「刀の構造」「刀・鐔の歴史」肥後鐔に見立てた段ボールや発泡スチロールの素材に装飾を施して、自分なりの鐔づくりを行った。完成後は実際に摸造刀に装着して眺めてみる体験も行った。参加数四四名。



図1 講師の先生より茶の点て方を教わった。（「子ども茶道たいけん！」より）

二月二二日「子ども茶道たいけん！」（関連展『誕生 肥後細川藩』）（テーマ「茶の湯ってなあに？」）「茶の湯の歴史」「茶道具」「茶室」「名人に聞こう！」）講師は肥後古流教授・松井照子氏。茶を点てて飲む体験を行い、その後、展示室

で美術品を鑑賞した。参加した子ども達は、講堂が茶室になっているのを見て「本当の茶室のようだ」と驚きの声を上げていた。参加数五四名。（図1）

## 2 平成二一（二〇〇九）年度プログラム

四月二六日「絵の具づくりたいけん！じぶん色をつくろう」（関連展『熊本城本丸御殿と御用絵師』）（テーマ「日本の伝統色ってどんなものがあるの？」）「本丸御殿の天井画に使われているのはどんな絵？」「御用絵師・杉谷雪樵について」）学芸員から本丸御殿「昭君の間」の絵や日本の伝統的な色についての話の後、膠を混ぜてラピスラズリで群青色、マラカイトグリーンで緑青色をつくった。また、その他の岩絵の具を使って、絵に色を塗る体験を行った。ま



図2 顔料に膠を混ぜて絵の具をつくった。（「絵の具づくりたいけん！じぶん色をつくろう」より）

た、丸御殿の天井画の原画をえがいた杉谷雪樵の絵を手本に、子ども達は自分のつくった色を塗って作品を仕上げた。参加数四三名。（図2）

五月二七日「子ども日舞たいけん」（関連展『忠臣蔵と武のこ



図3 蛤の貝殻に絵を描いた。(「貝あわせをつくろう」より)

ころし」(テーマ「日舞ってなあに?」「日舞での礼儀作法」「着付け体験」「扇子の使い方」)講師は日舞藤間流・藤間富士齋氏。日舞教室の生徒達が扇や鞠などを使って舞を実演。参加した子ども達は、着付けの体験や扇の扱い方などを教えてもらいながら体験を楽しんだ。参加数四一名。

九月六日「子ども茶道たいけん」(関連展『肥後の鳳凰』)二年目の活動。講師は肥後古流教授・松井照子氏。参加数

三四名。

十月十一日「貝あわせをつくろう」(関連展『華ひらくルネサンス』)(テーマ「貝合わせってなあに?」「何が描かれているかな?」「貝合わせの遊び方」)展示室で実物等を鑑賞した後、蛤に絵を描き、つくった作品で貝あわせをして遊んだ。参加数三一名。(図3)

### 3 平成二二(二〇一〇)年度プログラム

五月六日「花押書きに挑戦」(関連展『細川一門』)(テーマ「花押ってなあに?」「天下人の手紙」)展示してある書状に書かれている文字に注目して鑑賞した後、花押(自分が手紙を出したことを証明するサイン)を書く体験を行った。参加した子ども達は自分だけの花押を考え、各々できあがった花押を見せ合った。参加数二一名。

七月二五日「おりがみかぶとづくり」(関連展『細川家よろいの美』)(テーマ「鎧兜の種類」「当世具足の部分名称」「折紙による兜の作り方」「かぶる体験」)学芸員より兜の模倣品を使ったレクチャーの後、展示室で実物を鑑賞し、鑑賞した兜を参考にして特大折り紙で兜を折った。最後に皆で出来上がったものをかぶって見せ合った。参加数三三名。(図4)

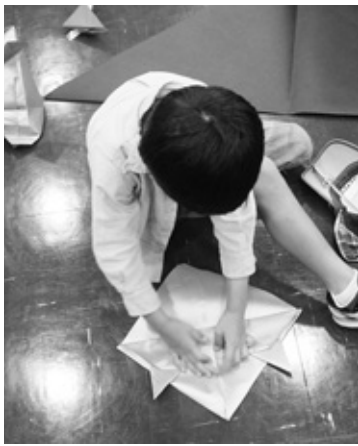


図4 特大折り紙でかぶとを折った。(「おりがみかぶとづくり」より)

八月二二日「絵巻づくり!くまもとの名所発見伝」(関連展『熊本名所発見の旅』)(テーマ「絵巻ってなあに?」「どんな形をしているの?」「領内名勝図巻ってなあに?」「何が描かれて

いるの?」「どのようにしてみるの?」展示室で領内名勝図巻を鑑賞した後、自分の住む町の名所を描く現代版名勝図巻づくりを行った。参加数二二名。(図5)

十一月七日「子ども能たいけん」(関連展『没後四〇〇年・古今伝授の間改修記念細川幽齋展』)二年目の活動。講師は喜多流能楽師・狩野琇鵬氏。参加数二一名。

二月二〇日「子ども茶道たいけん」

(関連展『ガラシヤと細川家の女性たち』)三年目の活動。講師は肥後古流教授・松井照子氏。参加数三八名

#### 4 平成二三(二〇一一)年度プログラム

四月二四日「永青文庫もの知りはかせに挑戦!」(関連展『細川コ



図5 展示場で領内名勝図巻を鑑賞した。  
〔絵巻づくり!くまもとの名所発見伝〕より)

レクシヨン永青文庫の至宝展』)参加した子ども達には展示品にまつわる「なぞなぞ」が書かれた巻物が手渡され、子ども達は巻物に書かれた質問に答えながら会場

をまわって美術品を鑑賞した。全ての展示室をまわり終わると、蒲島知事より「永青文庫もの知りはかせ」認定証が授与された。参加数三〇名。

六月五日「親子で茶道たいけん」(関連展『永青文庫の知られざる名品展』)四年目の活動。講師は肥後古流教授・松井照子氏。参加数七七名。

七月二四日「なりきり絵師たいけん」(関連展『細川家の絵師たち江戸絵画の精華』)(テーマ「絵師つてなあに?」)「絵師が使う道具」「金箔を使って描く体験」美術品鑑賞後、細川家と加藤家の家紋を題材にして岩絵の具や金箔などを使いながら色を塗る体験を行った。参加数四四名。(図6)



図6 岩絵の具や金箔などを使いながら、色を塗る体験を行った。(「なりきり絵師たいけん」より)

十一月六日「親子で能たいけん」(関連展『ガラシヤと細川家の女性たち』)。三年目の活動。講師は喜多流能楽師・狩野琇鵬氏。参加数四七名。(図7)



図7 講師による舞の実演。「親子で能たいけん」より

#### 四 成果と課題

##### 1 活動の成果

平成二〇（二〇〇八）年度から平成二三（二〇一一）年度までの四年間に五二八名の子も達が参加した。活動では、子も達が美術品の前に目を輝かせながら歩み寄り、無言でじっとみている場面や、おもむろに一緒にみていた友達に語り始める場面などみることができた。また、想像力豊かな発言に、他の子も達も、参観している周りの大人達も眼を瞠る場面もあった。上記は活動の場面の一つにすぎないが、鑑賞や体験の活動を子も達が楽しんでる様子を伺うことができた。

また、子も達の生きた声を引き出すことも大切である。活動後には多くの感想を頂いた。左記はその一部である。「日本の伝統文

実施内容の概要  
については当館  
ホームページに  
掲載。

<http://www.museum.pref.kumamoto.jp/>

化にますます興味が湧きました。」「細川家の国宝を含む文化財に興味があるので、もう一度見たいです。」「茶器の鑑賞が好きです。体験を通して茶道のことがわかりました。また展示がある時は、ぜひ来たい。」「熊本に住んでいるのに永青文庫についてあまり知らなかった。この機会に学ぶことができました。」「普段はあまりふれる事のできない日本の伝統文化の世界を知ることがとても新鮮に感じました。」「能や茶などを体験することが殆どないので、大変よい機会になりました。また、伝統文化に関する体験活動ができることを楽しみにしています。」等、参加した子も達の声を受けて本活動を実施した手応えを感じた。

##### 2 今後の課題

例えば古美術を取り上げた鑑賞活動を行う場合、難問が多いと言われている。ほとんどの子も達（小・中学生）は目の前にした対象が一体何のために使われていたのか実感を持って眺めることができなからである。美術品というよりも用途を持った物としての側面が強く前に出るため、日本の古美術を鑑賞するには作品の背景をイメージする力が必要となる。したがって想像力とそれを支える経験や教養があれば、子も達にとって古美術の鑑賞はもっと魅力あふれるものになる。西洋化された生活が日常となった現代の子も達にとって、体験活動は想像力を補助するための重要な機会となる。

今後は作品をより深く理解するために補助教材の更なる工夫が必



要である。内容も発達段階に応じて整理し系統化する必要もある。併せて子ども向けの鑑賞の手引きや、美術工芸品を模倣したものを収めた鑑賞ツールセットを用意して学校に貸し出す等、専門的な知識がなくとも誰もが古美術も含めた作品鑑賞ができるような体制をつくる必要がある。

## 五 おわりに

日本の伝統・文化を取り扱う教育とは、「子ども達自身が今日的な視点から我が国の伝統や文化をとらえ直し、日本のすばらしさを誇りに思うと同時に、世界の中で日本人としてよりよく生きていくために、何をどのように生かしていくかについて理解する実践する教育のこと」<sup>5)</sup>である。伝統や文化にはどのような背景があるのかについて学ぶことは、子ども達の理解をより確かなものにする。例えば子ども自身の生活とのかかわりの中で、その地域の気候・風土・環境条件を生かした伝統と文化を支える技術、素材を調達できる仕組みやつながりを理解することは、その後の生活に生かすことにつながるであろう。また、体験的な学習の充実を図ることは、子ども達に自ら学ぶ意欲や主体的に学ぶ態度を身につけさせると共に、学ぶ楽しさや成就感を体験させることにつながり、子ども達のその後の学習や生活に活用できるものになると考える。

併せて教育普及活動において、美術館に来て本物と出会う体験を演出し、印象付けて、それを次の展開として美術のみならず歴史や

文学などの学習の深まりにつなげていくことは重要である。つまり、美術館の教育普及活動の使命は、作品と向き合う体験から何を引き出し、つなげていくかにある。今後、参加者の鑑賞活動の質を高めることができるように今年度までの活動実績を踏まえ、より積極的な活動を実施していきたいと考える。そして、より多くの子ども達が永青文庫の宝に自分なりの新しい美を発見することを期待したい。

【註】

- (1) 「子ども美術館」は美術館ボランティアや学校の先生方の協力も得ながら各  
展示会の会期毎に開催している。なお「子ども美術館」以外の教育普及活  
動として、大人を対象とした「実技講座」（昭和五二年度より）、学芸員  
が学校に出かけて授業を行う「出張授業」（平成五年度より）、鑑賞授業  
教材セット「浜田知明作品鑑賞ボックス」の学校への貸出（平成十二年度  
より）、当館収蔵作品を展示し学校を一日美術館にする「スクールミュージ  
アム」（平成十八年度より）等を実施している。なお、「永青文庫たんけん  
隊」プログラムと本稿作成に際しては球磨工業高等学校教諭・染森千佳氏  
より資料提供等の協力をして頂いた。
- (2) 永青文庫は、江戸時代に肥後熊本の地を治めていた細川家に伝わる美術品  
や歴史資料等を保存・研究するため、細川家十六代当主護立氏によって、  
昭和二五年（一九五〇）に設立された公益財団法人。永青文庫には国宝八  
点、重要文化財三二点を含む約九万点の文化財を所蔵している。
- (3) 『初等中等教育資料No.889』伝統・文化に関する教育の充実と展開』（東洋  
館出版社二〇一一）二七ページの安野功氏による「伝統・文化に関する  
教育を充実させるためのポイント」の言説を基にしている。
- (4) 『中等教育資料No.884』伝統と文化を尊重する教育の充実』（ぎょうせい  
二〇一一）十九ページの内容を基にしている。
- (5) 『日本の伝統・文化理解教育指導資料』（東京都教育委員会二〇〇八）一  
七ページの内容を基にしている。

【参考文献】

- 『小学校学習指導要領 図画工作編』日本文教出版 二〇〇八  
『中学校学習指導要領 美術編』日本文教出版 二〇〇八  
中村哲編『和文化 日本の伝統を体感するQA事典』明治図書出版 二〇〇五